

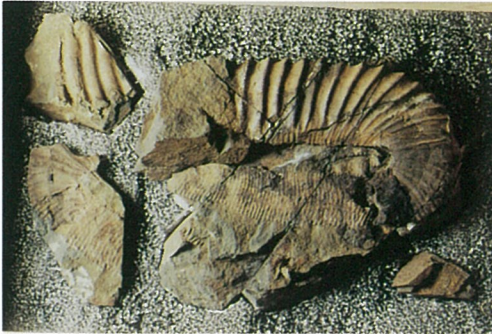


デメテル Demeter

群馬県立自然史博物館だより No.5

Newsletter of Gunma Museum of Natural History 1998.春

デメテルはギリシャ神話に登場する大地の女神で、群馬県立自然史博物館のシンボルマークになっています。



異常巻アンモナイトのヘテロセラス (酒井直一氏蔵)



サバの化石 (石原克彦氏蔵)



カルカロドン・メガロドンの歯 (岡部勇氏蔵)



シモアキマカイギュウの肩胛骨 (安中市教育委員会蔵)



マツモの化石 (工藤喜与治氏蔵)



ナウマンゾウの上アゴ (柴川清氏蔵)



ゾウクラゲの化石 (松原剛史氏蔵)



オキナエビスの化石 (井上浩吉氏蔵)



ブナの葉の化石 (福島県立博物館蔵)

第4回企画展 「見てみませんか、私が掘り出した自然の宝もの」

平成10年3月7日から5月31日まで、当館企画展示室にて第4回企画展「見てみませんか、私が掘り出した自然の宝もの」が開催されます。

自然の宝もの、とはいったい何でしょう？

今回の企画展ではさまざまな人たちが採集した化石を展示します。

化石は生命の進化や太古の地球の様子を知る手がかりを与えてくれます。つまり、それは地球(=自然)が私たちに与えてくれた宝もの一つ、と言えるのではないのでしょうか。

群馬からは勢多郡のヘリユプリオンや富岡市のヤベオオツノジカなどの化石が見つかっています。

しかし、こうした化石以外にも群馬や関東地方の太古の様子を語りかけてくれる化石がたくさん見つかっているのです。

この企画展では県内外の人たちがそれぞれ掘り出した“自然の宝もの”を多数展示し、それらが語る太古の群馬や関東地方の様子を紹介していきたいと思ひます。(学芸課 高来 祐司)

企画展特別講演会

「化石が語るむかしの地球—群馬の化石と自然史」

日時：3月22日(日)、13:30-15:00

講師：大森昌衛先生(麻布大学名誉教授)

※電話にて申し込みを受け付けております

特集

シンポジウム「宮澤賢治の中の自然」

シンポジウム「宮澤賢治の中の自然」

自然史博物館開館一周年を記念し、第3回企画展の関連行事として11月29日に開催され、多くの方にお集まりいただきました。当日は、秋田桂城短期大学学長宮城一男先生の基調講演と、パネルディスカッションの2部構成で、間にチェロの演奏を入れて行われました。

基調講演「自然科学者・宮澤賢治」

宮城先生は、自作のスライドと録音した音楽や音声を使って、花巻市の郊外を流れている北上川沿いで、賢治がイギリス海岸と名づけた川岸の地質学的説明や、そこをテーマにした賢治の作品から、宮澤賢治の科学者としての面を明らかにしてくださいました。その中で、賢治の自然科学というものへの姿勢、勉強の仕方などといったことが集約的に現われているのが、童話「イギリス海岸」であること、「イギリス海岸」には、単に景色を表現するだけでなく、歴史的に見てそこから想像を働かせて作品を書いていること、難しい自然科学の理屈を難しいことをレベルを落とさず、やさしく農民や生徒たちに伝えるといった賢治の自然科学者・教育者の面がよく表われていること等、科学者賢治を明らかにしてくださいました。

また、晩年に作った「煙」という詩は、イギリス海岸を地質学的にとらえているのと同時に、環境汚染にも目をむけた賢治の、イギリス海岸への



基調講演講師 宮城一男氏



パネルディスカッション参加各氏(前列左から、力丸、西田、里見、寺沢、後列左から、矢幡、藤井、長谷川館長)

思いを集約した作品であり、晩年に東北砕石工場に技師として勤めた作者が、科学はロマンだけでなく、人間の経済、生産に関係した厳しい面があることを、強く意識していることが窺えると話してくれました。そして、「ひと日ははかなく言葉を下し」という

詩は、賢治のそのころの気持ちが実によく分かる作品であるとまとめてくださいました。

パネルディスカッション 「宮澤賢治の中の自然」

コーディネーターの藤井浩さん(上毛新聞社記者)の「賢治は踏み込めば踏み込むほど広さや深さを感じさせてくれる不思議な人だと思う。非常に多面的に活動した人で、それぞれの角度から研究されているが、賢治をある面から規定してしまうと、そこからこぼれ落ちたものが気になる。賢治の自然観、世界観はどういうものだったのか。それは、21世紀を生きる私たちにとってどういう意味があるのかをテーマにして話し合っていきたい。」

という言葉からディスカッションが始まりました。パネラーの方のご意見の極く一部を載せます。今後も、話題性のあるテーマでのシンポジウムを行っていきます。ご期待ください。

(教育普及課 里見立夫)



パネルディスカッション



チェロ演奏の柳田耕治氏

| 氏名(敬称略) | 経歴 | 賢治の自然観 |
|---------|---------------|--|
| 西田良子 | 元大谷大学教授 | 賢治の中の自然というのは、私たちのように目とか耳とか皮膚感覚といった五感でとらえただけでなくプラスもう一つの感覚、第六感あるいは四次感覚とか、そういうものでとらえていたと考えられる。 |
| 力丸光雄 | 岩手医科大学教授 | 賢治は20世紀後半の、この科学延長上のテクノロジーの暗さを予感していたのかなとも思う。しかし、彼は科学を否定したのではなく、近代科学というものとも宗教(仏教に限定しない)というものを一つに統合した新しい芸術を作ろうと主張した。 |
| 矢幡洋 | 日本ホリスティック協会理事 | 賢治は、自然に対して私たちが豊かなイマジネーションを働かせながら関わっていくということを重視していた。人間が開発しなければ生きていけないという原罪を背負ながらも、むき出しの自然支配に陥らずに、自然と共存していくという可能性を見ていたのではないかと思う。 |
| 里見京子 | 声優 | 食料不足の集団疎開の時担任の先生が読んでくれ、心を満たしてくれた「双子の星」を思い返し、大好きな「水仙月の四日」を朗読してくれた。賢治の作品を朗読するときは、ごく当たり前のように自然に、そしてできるだけ技巧をなくした読み方で朗読したいと考えている。 |
| 寺沢敬子 | ともだち文庫代表 | 「無声慟哭」の詩の中で、挫折をしたり悩んだり、それでもみんなの幸せのため、真の道を求めて歩いた生の賢治の生き方が見えてくる。お母さんを通して賢治の持っている優しさが子供に伝わり、一人でも多くの子が賢治の童話を読んでもらうのが願いだ。 |

第3回企画展「宮沢賢治と自然」を終えて

第3回企画展「宮沢賢治と自然」は、平成9年10月4日～12月7日までの56日間開催されました。この間の入館者は40,065人でした。これは、1日平均約715人となります。

この企画展は、文学者として知られる宮沢賢治をナチュラルリストとして見直そうという目的で行いました。今回、新しい試みとして、賢治が教鞭をとった農学校や羅須地人協会での実習のイメージを再現するため、インストラクターによる化学実験を行いました(次頁のトピックス参照)。これは、毎回まわりに黒山の人だかりができる盛況ぶりでした。

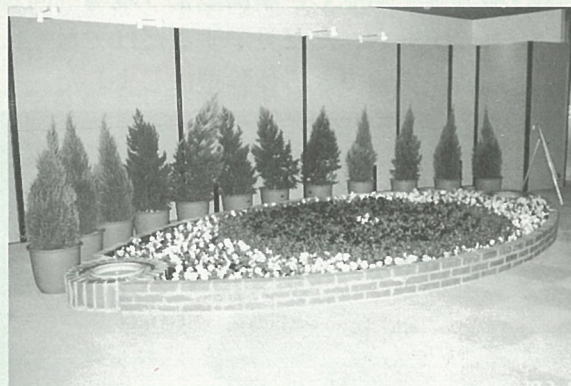
また、賢治が設計した花壇「涙ぐむ眼」を、本物のパンジーの苗を使って作りました。130ルクスという暗さの中で、どこまでパンジーがもつのか、一種の実験でした。今回は、2週間に1度の入れ替えで対応しましたが、実際には1週間で入れ替えた方が、本物ならではののみずみずしさが保てたのではないかと思います。

さらに、賢治が生涯追求したテーマである「土」に関連して、富岡・安中地区で採掘されているベントナイトをお土産として配布しまし

た。安中市にある豊順鋳業(株)さんにご協力をいただいで実現したもので、水に入れると膨らんで溶けてしまう不思議な石は、小学生の団体が来るとあっという間になくなりました。

最後に、貴重な資料を快く貸していただいた宮沢賢治記念館の館長さんほか多数の方々、また原稿執筆や貴重な助言等、ご協力いただいた宮沢賢治学会の諸先生方、会員の皆様、本当にたくさんの方々にお世話になりました。紙面を借りて心から感謝申し上げます。

(学芸課 小久保博志)



会場に作られた「涙ぐむ眼」の花壇

第3回企画展「宮沢賢治と自然」開催期間中、『教室ニ来ラレタシ』のコーナーで、宮沢賢治にちなんだ実験を行いました。インストラクターは、加藤辰五郎氏・茂木伊一氏・私の3名で、延べ52日間務めました。しばらくの間「過冷却実験」と「ケミカルガーデン」の2つしか実験することができませんでしたが、試行錯誤の末、以下の日程にたどりつきました。

| |
|--|
| 11:00~11:20 「過冷却実験」 |
| 過冷却（過飽和）状態の硫酸ナトリウム飽和溶液に刺激を加え、瞬時に結晶をつくる |
| 13:00~13:20 「不思議物体づくり」 |
| ポリビニールアルコール洗濯のり（コロイド溶液）と飽和ホウ酸水を混ぜ合わせてゲル状物体をつくる |
| 14:00~14:20 「ケミカルガーデン」 |
| 珪酸ナトリウム溶液に金属化合物を加えて反応を観察する |
| 15:00~15:20 「偏光板の不思議」 |
| 簡易偏光顕微鏡を用いた主要造岩鉱物を観察する |
| 土日、祝祭日の場合上記の他に・・・ |
| 16:00~16:20 「ケミカルガーデン」または「液体窒素」 |
| 液体窒素で身近な物質や物体を冷却し、様子を観察する |

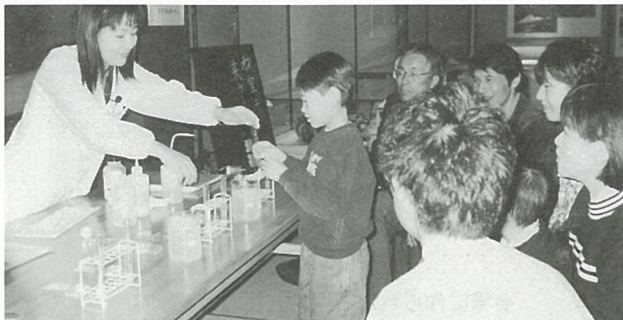
演示実験にもいろいろな手法がありますが、今回は、以下のように行いました。

<スペース・設備>

企画展示室内の一隅に演示実験用大型机1台と来館者用椅子数脚を置きました。間仕切り等はなく、来館者の実験中の参加、退去も自由です。

<進め方>

インストラクターは実験開始時刻5分前に必要な薬品、器具等を用意し、準備室より現場へ向かいます。どの実験も、ただ見学するだけでなく、要所で来館者が実験できる体験型にしました。



▲ 結晶づくりに挑戦する参加者

参加者数

期間全体の実験参加者は、延べ5,136人で、実験1回あたりの参加者を平均すると24人でした。

参加者の声

参加した来館者のほとんどの方が実験に対して積極的に、科学を楽しもうという雰囲気の中で行うことができました。終了後も熱心に質問した方や、意見・感想を述べてくれた方もいました。

その一部を、以下に紹介します。

- ・「宮沢賢治と実験ってピンとこなかったけど、今日の実験と説明でよくわかりました。」
- ・「面白かったわ～。子供も連れてくれば良かった～。実験は何日までやってるの？」
- ・「液体だったのにサーッと白くなって固まっちゃって不思議。」
- ・「石も顕微鏡で見るときれいなんですね。」
- ・「40年ぶりにケミカルガーデンを見たよ。学生時代文化祭で展示したんだ。懐かしいね。」
- ・「家に帰ってから自分でやってみたいので詳しい実験方法を教えてください。」
- ・「今日ねえ、実験ぜんぶ見たよ。楽しかった。バイバイ、また来るねえ。」

また、自宅に戻ってから実験を試みた方から、電話での問い合わせも数件ありました。

評価と問題点

実験参加者の反応の大多数が好意的なものであることから、インストラクターによる演示実験は、概ね成功したといえると思います。

しかし、全く問題がなかったとはいえません。

実際に来館者の前で実験を行う我々インストラクターと、必要な薬品・器具類を購入する人間が別であったことが、演示実験に影響しました。

例えば、以下のようなことです。

- ・当日までに必要な薬品や器具が揃わず、予備実験が不十分のまま演示実験を行わざるを得ない場面がありました。
- ・今回用意されていた実験器具類は小型のものばかりで、薬品類も少量ずつしか使用できませんでした。

事前に、計画→実践→評価→改善という流れを整えて臨めば、より円滑にできたはずです。

また、1回の実験で数十人集まることも多いので、見学者数・対象に応じて、実験内容を選択したり、器具サイズや薬品量を調節できれば、参加者がより楽しめるものになったと思います。

今回の試みをさらに発展させ、インストラクターと参加者でつくるInteractive Science Attractionが本当に実現すれば、「何度も訪れたい博物館」になるはずです。（野村美子）

自然史講座

「森の役割」

平成9年12月7日(日)に、自然史講座「森の役割」を開きました。今回は初の試みとして、展示室でジオラマや標本を用いた説明を取り入れました。

前半の最初は、古代の森林。シダ植物が発達した古生代石炭紀の森林、針葉樹が広がった中生代ジュラ紀の森林、現在広くみられる被子植物が出現した中生代白亜紀の森林について、おのおののミニジオラマをもとに説明しました。

次に、群馬県の森林。丘陵帯のクヌギーコナラ林、山地帯のブナ林、亜高山帯の針葉樹林についてジオラマで特徴を観察し、さらに、二次林であるクヌギーコナラ林の維持と人の影響、極相林のシラカシ林への遷移などを学びました。当初の予想に反して34名という多数の方に参加していただ

いたため、じっくり観ていただけなかったのが残念でした。

後半は学習室でOHPを用いた講義です。まず、人間と森の関係について。メソポタミアや地中海の古代文明による森の荒廃、縄文人による森の利用、江戸時代のノラとヤマなど。次いで森の効用について。主に、温度の緩和、「緑のダム」といわれる森林土壌による水の保全と浄化、災害防止などの説明をし、さらに、現在の緑の状況と回復へ向けての取り組み例をお話ししました。

これからの人間は森を代表とした身近な自然との共生が大切だと思います。短い時間の中では十分にお話できませんでしたが、3月7日から5月31日まで開催する特別展「知ってますか、森は緑のダム」の中でも関連した展示を行いますので、是非ご覧になって自分なりの森とのつきあい方を考えて下さい。

(学芸課 綿貫 攻)

天体観望会

12月6日(土)夕方6時から、講師に新井浩之先生を迎え天体観望会を行いました。

今回のメインである「アンドロメダ大銀河」は、地球から約230万光年の彼方にあり、肉眼で見える最遠の天体です。望遠鏡で見ても楕円のぼんやりした雲のようには見えませんが実体は銀河系の2倍ほどの質量を持ち、約4,000億個の太陽のような恒星が存在しているのです。写真に撮るとアンドロメダ大銀河、別名M31の渦巻き構造がわかります。私たちの住む銀河系はこのM31によく似ていると考えられています。

(学芸課 萩原真樹)



アンドロメダ大銀河
(撮影、小森谷 順一)



天体を観察する参加者

天体観望会に参加して

(富岡小学校3年 松本佳織)

| |
|-------------------------|
| わたしは、四月二十三日生まれなのでおうしぎ |
| ですが、星にきょうみがなかったので、どの星が |
| おうしぎのどんどこころなのか、ぜんぜん知りま |
| せんでした。けれども、かんさつ会に行き、勉強 |
| したところ、「アルデバラン」という、赤い星が |
| おうしぎの顔だ、と言うことがわかりました。そ |
| して、「アルデバラン」の上にある、たくさん |
| の星が集まって、できている、「すばる」という、 |
| 星だんをぼうえんきょうで、見ました。その、た |
| くさんの星は、小さな宝石を夜空にちりばめたよ |
| うでした。 |
| その他にも、ベガサスぎやオリオンぎなどもお |
| しえてもらいました。 |
| 家に帰って「太陽をめぐる十二の星座の物語」、 |
| を読みました。わたしは、星がとてもおもしろく |
| すきになってきました。 |
| これからも、星のかんさつ会にさんかして、星 |
| のことをたくさん知りたいと思います。 |
| 新井先生ありがとうございました。 |

展示解説員から

「あれー、何これ。おもしろい！」と笑い声の絶えない場所が、Dコーナー『自然界におけるヒト』の入口です。ここには、大きな3Dパネル（見る位置によって写真が変わる）が2枚あります。直立二足歩行を始めたと言われるアファール猿人と、遺伝子レベルでヒトに一番近いと言われるチンパンジーが、骨になったり、元の姿に戻ったりするのです。お客様が驚きのあまり声をあげてしまうのも無理はありません。特に、小さな子どもは、不思議そうに目を丸くして、体を左右に動かしています。

驚くのは入口だけではなくありません。中へ進むと、数多くの頭骨や剥製、精密にできた等身大人形、ミイラなどが所狭しと展示されているのです。一見どこかの研究室へ迷い込んだかのような気分になります。その中でもひときわ目に付くのが、等身大人形を用いたジオラマの数々です。その展示をよく眺めていると、ヒトの歴史をタイムスリップした感じと何とも言えないなつかしさを覚えます。そして、今日の私たちがあるのは、その時代に生きた人々が、厳しい自然環境の中で素晴らしい進化を遂げた結果なのだと実感します。

展示の見方も様々ですが、最後の方ともなるとつい早足になり、見過ごしてしまいがちです。このコーナーで足を止め、ヒトの未知なる世界に入り込んでみて下さい。きっと素晴らしい発見が皆さんを待っていることでしょう。（展示解説員 笠原美千代）



ボランティアから



『私にも何かできませうお手伝い』。これは、私が小学校6年生の時に作った標語です。そして高校に入学したときに、私が住む町の県道に、この標語を使った

立て札が立ちました。これを見たとき、今の私だったら社会のために何かできることがあるかも知れない、と思うようになりました。

そんな時、自然史博物館でボランティアを募集していることを知り、迷わず応募しました。沢山の人と接し、自分の知らないことをもっと学びたいと思ったからです。

実際に活動してみると、何もかもが初めてで、どうしたらいいのかわからない事ばかりでしたが、一緒に活動している方達との会話が、私の不安をかき消してくれました。もしかしたら、途中で挫折していたかも知れませんが、優しい言葉をかけてくれた皆さんにとっても感謝しています。

そして今、私は優しい先輩達に囲まれて、情報コーナーで活動しています。まだ自分には、本の整理しかできませんが、これは私にできる小さなお手伝いであると思っています。これからもまた、周囲の方に力を貸していただきながら精一杯頑張ります。そしてもっと色々な事に挑戦してみたいと思っています。

（情報コーナー担当 清水亜紀子）

※清水さんは高崎商科短大付属高校の3年生です。

ホームページの紹介

群馬県立自然史博物館では、資料整理業務を効率化に行い、収集・蓄積した豊富な情報を、有効に利用できるようにすることを目標としています。また、楽しみながら簡単な操作で、わかりやすく、質の高い情報の提供をする「情報発信センター」になることも目指しています。

当初、ハイパーテキストベースのパソコン通信局として、情報提供を始めました。現在は、インターネットサーバに切り替えています。

画面は、直感的に操作しやすい構成を心がけました。

提供内容は、イベント情報・友の会情報・ボランティア情報・収蔵品情報・図書情報・施設案内・博物館だ

よりなどです。なかでも、収蔵情報は、館内で提供している情報と同じ量の件数を提供しています。提供情報は、教育機関での利用を著作権法範囲内で認めています。

また、利用者の声で意見・質問を受付けていますので、みなさまのご意見をいただき、内容・構成に反映していきたいと考えています。

さらに、新しい技術も積極的に採用し、新たな情報を提供していく予定です。トップページへのリンクは自由ですので、多くの方にご利用いただければと思います。

アドレス：<http://www.gmnh.pref.gunma.jp>

（学芸課 野村正弘）

自然史博物館友の会会員募集

友の会は、自然に関心のある方が集まり、知識や教養を高めながら、博物館を支援する会です。

現在、平成10年度の会員を募集中です。この機会に、是非ご入会ください。

1 会費

- ・個人会員(児童・生徒 1,000円、高校生・学生 2,000円、一般 3,000円)
- ・家族会員(同居している方なら何人でも) 5,000円
- ・賛助会員 一口20,000円

2 特典

- ・1年間入館料が無料
- ・印刷物等の博物館からの情報の配布
- ・ミュージアムショップの品の割引購入
- ・友の会主催行事への参加等

3 手続き

博物館総合案内で直接申し込むか、所定の郵便振替用紙を使って郵便局の窓口で申し込みます。ホームページでも紹介しています。

詳しいことは、博物館内の友の会事務局までお問い合わせください。

(教育普及課 里見立夫)

入館者30万人達成

第3回企画展「宮沢賢治と自然」の終了を目前にした12月5日(金)に当館開館以来30万人目のお客様をお迎えしました。

30万人目になったのは、富岡市内に住む栄養士山田智子さん。家族連れかと思いましたが、母親の洋子さんと親戚の方とのご来館でした。富岡の山田さん宅へ集まった親戚が帰られる前に見学に来られたそうです。

智さんは「職員の方がたくさん並んでいたので、VIPがいらっしゃるのかと思っていました。まさか30万人目の来館者を待っているとは思いませんでした。」と驚いていました。(教育普及課 樺澤 誠)



自然の恵み2 (群馬県の天然記念物)「兜岩層のカエル化石」

今から60年ほど前に兜岩層から出たカエルの化石がアカガエル属の新種 (*Rana architemporaria*) であると報告されました。近年、同じ地層から植物や昆虫の化石が沢山出ることがわかり、多くの採集者が山に出入りするようになりました。その中には、もちろんカエルの化石も含まれています。今までに10体以上発見されており、おそらく3種類以上はいたと思われます。この地層の年代は、500万年(鮮新世)ほど前のものです。

兜岩層のカエル化石の特徴は、保存がものすごく良いことです。世界では、中国(中新世)・旧チェコスロバキア(第三紀)・スペイン(中新世)などに有名な産地がありますが、おそらくどこのものよりも良質な化石といえます。軟質部が残っていることだけでも珍しいのですが、皮膚の模様までが鮮明に残されていることはきわめて稀なことで、世界でもほとんど例がありません。

さらに、オタマジャクシの化石も何個か発見

されています。その1つは、尾は完全に残っています。一方、前足は出はじめたところで、後足はかなり大きく発達しています。このことから、一部の化石は春先のオタマジャクシが出はじめた頃に化石になったことを示しています。また、この保存の良さからみて、あっという間に地層の中に閉じ込められてしまったことを教えてくれます。

写真にある2箇のカエルは骨格が揃っているだけでも珍しいのに、このように皮膚から表面の模様まで保存されている例はかなり珍しいので、1997年に群馬県の天然記念物(112号)に指定されました。(館長 長谷川善和)



野莉家標本



茨木標本

新収蔵資料

ニジイロクワガタ

ニジイロクワガタは、背中がタマムシのように虹の七色に輝くクワガタムシです。二本ある角は、上向きに反り返っていて、相手をはさみつけるというより、すくい上げるはたらきをもっているようです。

オーストラリア北部の熱帯雨林にすんでいて、羽の虹色の輝きを仲間どうしのコミュニケーションとして使っているようです。そのため、暗い林では都合が悪いようで、比較的明るい林にすんでいます。幼虫やさなぎは、乾燥のしにくい表面の

かたい倒木のなかで生活しています。

(学芸課 須永 智)



オス



メス

インフォメーション (4月～6月の行事)

3月7日(土)～5月31日(日)

企画展「見てみませんか、私が掘り出した自然の宝もの」
特別展「知ってますか、森は緑のダム」

4

- 12(日) 特別展記念講演会「森と文明」
講師 安田 喜憲(国際日本文化研究センター教授)13:30-15:00
- 19(日) ピテカントロプス研究最前線
- 29(水) 雑木林の春

5

- 23(土) 昼間の金星を見よう
- 24(日) 鉱物の実験
- 27(水) 指導者講習会

6

- 4(木) 春の大三角形
- 14(日) 桐生と足尾山地の自然(会場:桐生市立中央公民館)
- 21(日) 身近な環境フォーラム
- 29(月)～7月2日(木) 燻蒸のため臨時休館

利用案内

- 開館時間/午前9:30～午後5:00(ただし入館は4:30まで)
- 休館日/毎週月曜日(祝日の場合は火曜日)・年末年始
その他の都合により休館することがあります。
- 観覧料/一般500円(400円) 高校・大学300円(240円)
小・中学生100円(80円)
ただし3月7日(土)～5月31日(日)は企画展開催中のため一般700円(560円)、
高校・大学生400円(320円)、小・中学生200円(160円)
※1.()内の数字は、20名様以上の団体割引です。
※2.65歳以上・幼児・身体障害者は無料

■凡例

- 自然教室
- 天体観望会
- 講演会・シンポジウム
- ファミリー自然観察会
- 自然史講座

休館日

○印の日は休館いたします。

| | | | | | | | | |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|---|
| 4 月 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | |
| | | | | | 1 | 2 | 3 | 4 |
| | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | |
| | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | |
| 5 月 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | |
| | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | | | |
| | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | |
| | | | | | | 1 | 2 | |
| 6 月 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | |
| | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | |
| | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | |
| | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | |
| 6 月 | 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | |
| | | | | | | | | |
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | | |
| | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | |
| 6 月 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | |
| | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | |
| | 28 | 29 | 30 | | | | | |
| | | | | | | | | |